北海道医報購読料年間3,000円。北海道医師会員にあっては会費の中に含まれています。

季節風

内視鏡は季節風にリニューアルしました

「四生」

情報広報部副部長　宮本　慎一

仏教では「四生」といって、生物が生まれるタイプを「胎生」、「卵生」、「湿生」、「化生」の四つに分類しています。「胎生」というのは親と同じ形をして生まれてくるもの、「卵生」は卵の形で生まれてくるもの、「湿生」は土から、「化生」は空気から生まれてくるもの、ということらしいのですが、一方、ユダヤ教では最初の生き物は、神がご自分の手で造られたということになっています。何を材料にこれらの生き物を造ったかというと、一つは土で、もう一つは骨で造るというのです。

旧約聖書の「創世記」によると、神は第１日目で「天と地」「朝と夜」を、第２日目には「空」を、第３日目には「陸と海」「草と木」を、第４日目には「太陽」を、第５日目には「鳥と魚」を、そして第６日目には「家畜と虫と獣」「人間（男と女）」を造ったとされています。このとき神は、最初に男（アダム）を造っています。男には伴侶が必要であろうということで、そのあばら骨を１本抜き取って、それで一人の女（イヴ）を造った、というのです。神はすべての生物と人間の男は土から造られたから、これは仏教でいう「湿生」にあたります。しかし、女は男の骨（あばら骨）から造られたということですから、仏教でいうところの「四生」のどれにもあてはまりません。そこで、仏教的に理解するには「骨生」といって、骨から生まれる生まれ方を設けなければなりません。

ところで、神が最初の女を造ったときの骨ですが、ユダヤ教の『律法』には「あばら骨」と明示されているとのことですが、これには異説があります。というのは、男性のあばら骨も、女性のそれと同じく左右同数であり、そこから１本を抜き取ったとは思えないからです。あばら骨を抜き取ったのであれば男のあばら骨は左右どちらか１本少ないはずですが人類みな同じ数、しかもあばら骨を抜き取った傷も、肉でふさいだ痕もありません。だとすると、神はどこの骨を抜き取られたのでしょうか？答えはもちろんペニスからです。なぜかというと、ヒト以外の霊長類、クマやイタチ、イヌなどの食肉類などではペニスにはちゃんと陰茎骨があるのに、われら人間にかぎって、あそこは海綿体でしかないからです。

さて、この二人は、神に背くという重い罪を犯してしまうわけですが、女は罰として出産の苦しみを与えられたばかりか、男とともに楽園を追放されてしまいます。このときに男が受けた罰の一つがErectile Dysfunction（ED）であろうというのが筆者の推測です。最近アメリカではEDであることが妻からの離婚訴訟の理由として認められているとのことです。このEDに対してはバイアグラが大きな効果を発揮しています。しかし、薬理作用によって半ば強制的に勃起させられるというのも切ない気がします。

以前は成人病と呼ばれていた疾患群を国は「生活習慣病」と命名し、病気になるのは国民の生活習慣が問題だとキャンペーンをし、「健康日本21」なる施策にて健康づくりに邁進しています。その法的裏づけとして「健康増進法」がこの５月１日に施行されました。法律にて健康づくりに邁進させられるわけですが、「次第に枯れる」ということなどは許されなくなり、さらには「病人は非国民」などということにならなければよいのですが。